E-8

分散形態論と日本語の動詞由来複合語

長谷川　拓也・大関　洋平
（東京大学大学院総合文化研究科）

要旨

本研究は、日本語の「動詞由来複合語」（deverbal compound）について、伊藤・杉岡（2002）と由本（2014）の観察を踏襲しながら、内項が複合語の外側で認可される（「外部表示」；影山 1999）か否かという観点から新たな一般化を提示し、「分散形態論」（Distributed Morphology; Halle and Marantz 1993）の枠組みを用いた統一的な説明を行う。伊藤・杉岡（2002）は、日本語の動詞由来複合語が内項を含むものと付加詞を含むものの 2 つに分類されると分析した。それに対し、由本（2014）は内項を含む複合語の中に伊藤・杉岡（2002）の分析の反例が数多く存在することを指摘した。それ以降、付加詞を含む複合語を含めた包括的な一般化が提案されていないが、本研究は、日本語の動詞由来複合語が複合の結果として内項を複合語の外側で認可するものと内側で認可するものの 2 種類に分類されると主張する。さらに、本研究は、分散形態論の枠組みを用いて、日本語の動詞由来複合語に対して 2 種類の統語構造を仮定し、統語構造の差異から品詞・アクセント・連濁の有無・意味解釈に関する差異が導かれると主張する。

1. はじめに

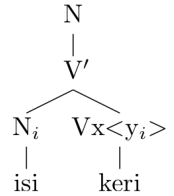
語の仕組みと語形成の解明（伊藤・杉岡 2002）は言語学における重要な目標の 1 つであるが、日本語における語形成のうち、動詞とその補語からなる「動詞由来複合語」（deverbal compound）は生産的な語形成の 1 つである。本研究は、日本語の動詞由来複合語について、伊藤・杉岡（2002）と由本（2014）の観察を踏襲しながら、内項が複合語の外側で認可される（「外部表示」；影山 1999）か否かという観点から新たな一般化を提示し、「分散形態論」（Distributed Morphology; Halle and Marantz 1993）の枠組みを用いた統一的な説明を行う。

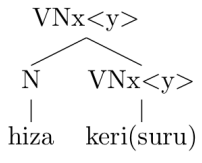
本研究の構成として、まず 2 節では先行研究の分析を概観する。次に、3 節で日本語の動詞由来複合語に関する新たな記述的一般化を提示する。そして、4 節で日本語の動詞由来複合語に対して分散形態論の枠組みを用いた統一的な分析を行う。5 節は結論である。

2. 先行研究

伊藤・杉岡（2002）は、日本語の動詞由来複合語が内項を含むものと付加詞を含むものの 2 つに分類され、前者は「項構造」（argument structure）、後者は「語彙概念構造」（Lexical Conceptual Structure）において派生されると主張した。そして、両者の構造の差異が、品詞・アクセント・連濁の有無に反映されていることを説明した。まず、両者の構造について、伊藤・杉岡（2002）は内項を含む複合語と付加詞を含む複合語がそれぞれ(1a, b)のような構造になると主張している。

(1)　a.　内項を含む複合語　　b.　付加詞を含む複合語（VN = verbal noun）





内項を含む複合語は、(1a)のような主要部のない外心構造を持ち、名詞としてふるまう。一方、付加詞を含む複合語は、(1b)のような右側主要部の内心構造を持ち、動名詞としてふるまう。

そして、この両者の構造の差異は、品詞・アクセント・連濁の有無に反映されている。内項を含む複合語は、(2a)に示すように、「する」を直接付加できない・起伏型のアクセントを示す・連濁が起こらないという特徴を持っている。一方、付加詞を含む複合語は、(2b)に示すように、「する」を直接付加できる・平板型のアクセントを示す・連濁が起こるという特徴を持っている。

(2) a. 内項を含む複合語

石蹴り（いしけり）／草取り（くさとり）／本読み（ほんよみ）＊（を）する

b. 付加詞を含む複合語

膝蹴り（ひざ**げ**り）／横取り（よこ**ど**り）／棒読み（ぼ**ー**よみ）する

これらの特徴は、(1)に示した構造から自然に導かれるものである。内項を含む複合語は名詞であるため、「する」を付加する際に必ず対格を伴うのに対し、付加詞を含む複合語は動名詞であるため、「する」が直接付加される。また、基本的に日本語の複合語アクセント規則では、右側要素のアクセントが複合語全体のアクセントになる傾向が強い。内項を含む複合語は右側要素が動詞であるため、(3a)に示す動詞連用形の動詞用法のアクセントが保持される一方、付加詞を含む複合語は右側要素が名詞であるため、(3b)に示す動詞連用形の名詞用法のアクセントが保持される。さらに、日本語の複合語において、連濁は右側が主要部の場合に起こる（里子（さと**ご**）、苗木（なえ**ぎ**））のに対し、並列関係の複合の場合には起こらない（親子（おやこ）、草木（くさき））。日本語の動詞由来複合語の場合も同様で、内項を含む複合語は主要部を持たない外心構造であるため、連濁が起こらないのに対し、付加詞を含む複合語は右側主要部の内心構造を持つため、連濁が起こる。

(3) a. 不定詞（動詞）用法： 本を読みに行く よみに

b. 名詞用法： 本の読みが浅い よみが （伊藤・杉岡 2002: 126）

これに対して、由本（2014）は内項を含む複合語の中に伊藤・杉岡（2002）の分析の反例が数多くあることを指摘し、内項を含む複合語を結合価が減じられるものと維持されるものの 2 種類に分類した。具体的には、内項を含む複合語の中には、(4)に示すように、「する」を直接付加できる・平板型のアクセントを示す・連濁が起こるという、付加詞を含む複合語の特徴を持つものが数多く存在すると指摘している。

(4) a. 結合価が減じられる複合語

・場所項と結合したもの

船積み（ふな**づ**み）／瓶詰め（びん**づ**め）／蔵入り（くらいり）する

・対象項と結合したもの

色付け（いろ**づ**け）／砂糖がけ（さとう**が**け）／墨入れ（すみいれ）する

b. 結合価が維持される複合語

色落ち（いろおち）／値引き（ね**び**き）／色止め（いろ**ど**め）する

結合価が減じられる複合語とは、(5a)に示すように、複合の結果として結合価が元の動詞の結合価より 1 つ減じられるような複合語である。一方、結合価が維持される複合語とは、(5b)に示すように、複合の結果として結合価が元の動詞と比べて変化しない複合語である。

(5) a. 船に救援物資を積む→救援物資を**船積み**する
b. セーターの色が落ちた→セーターが**色落ち**した（由本 2014: 182）

しかしながら、由本（2014）は伊藤・杉岡（2002）の分析の反例となる内項を含む複合語の分析に留まっており、それ以降、付加詞を含む複合語を含めた包括的な一般化が提案されていない。そこで、本研究では、伊藤・杉岡（2002）と由本（2014）の観察を踏襲しながら、内項が複合語の外側で認可されるか否かという観点から新たな一般化を提示し、分散形態論の枠組みを用いて日本語の動詞由来複合語の形成を統一的に説明する。

3. 記述的一般化

3.1 日本語の動詞由来複合語に関する新たな記述的一般化

本研究は、日本語の動詞由来複合語が、複合の結果として内項が複合語の外側で認可されるものと内側で認可されるものの 2 種類に分類されると主張する。内項が外側で認可される複合語と内側で認可される複合語の間には、品詞・アクセント・連濁の有無・意味解釈に関して以下の**表 1** に示すような差異が存在する。

	内項が外側で認可される複合語	内項が内側で認可される複合語
例	太郎が次郎を膝蹴り（*を）した。 （ひざ**げ**り）	太郎が石蹴り*（を）した。 （いしけり）
品詞	動名詞（「～する」）	名詞（「～をする」）
アクセント	平板型	起伏型
連濁	起こる	起こらない
意味解釈	比喩的な意味	文字通りの意味

表 1：日本語の動詞由来複合語に関する新たな記述的一般化

内項が外側で認可される複合語は、(6a)に示すように、「する」が直接付加できる・平板型のアクセントを示す・連濁が起こるという特徴を持っている。[1]それに対して、内項が内側で認可される複合語は、(6b)に示すように、「する」が直接付加できない・起伏型のアクセントを示す・連濁が起こらないという特徴を持っている。[2]

(6) a. 内項が外側で認可される複合語
・付加詞を含むもの
膝蹴り（ひざ**げ**り）／横取り（よこ**ど**り）／棒読み（ぼー**よ**み）する
・結合価が減じられるもの

[1] 「ポイ捨て（ぽいすて）」は、連濁が起こらないという点で数少ない例外である（伊藤・杉岡 2002: 128）。
[2] 「米作り（こめ**づ**くり）」「里帰り（さと**が**えり）」など連濁が起こるものもいくつか存在するが、これは、後部要素が 3 モーラの場合、動詞連用形が単独で名詞として使われることが多い（作り、帰り）ので、後部要素が名詞として再分析されているからだと考えられる（伊藤・杉岡 2002: 128）。

船積み（ふなづみ）／色付け（いろづけ）／蔵入り（くらいり）する

・結合価が維持されるもの

値引き（ねびき）／色止め（いろどめ）／色落ち（いろおち）する

b.　内項が内側で認可される複合語

・内項を含むもの

石蹴り（いしけり）／草取り（くさとり）／本読み（ほんよみ）＊（を）する

ここで、「内項が外側で認可される」とは、(7a)のように、複合の結果として内項が複合語の外側に残るということを意味する。一方で「内項が内側で認可される」とは、(7b)のように、複合の結果として内項が完全に複合語内に取り込まれ、外側に残らないということを意味する。

(7)　a.　太郎が次郎を膝で蹴った。→太郎が次郎を**膝蹴り**した。

b.　太郎が石を蹴った。→太郎が**石蹴り**をした。

3.2 日本語の動詞由来複合語のアクセント

本節では、日本語の動詞由来複合語のアクセントが複合名詞アクセント規則（秋永 1985，Kubozono 1995）に従っているということについて説明する。日本語の動詞由来複合語は、「手作りのパン」「ゴミ拾いをする」などの名詞的用法を持つことからいわば動詞由来複合「名詞」であるため、一般的な複合名詞のアクセント規則に従うのは自然である。

東京方言における複合名詞アクセントは、基本的に後部要素の音韻的特徴によって決定される（秋永 1985，Kubozono 1995）。後部要素が 1, 2 モーラの場合は、(8)に示すように 3 つのタイプの複合名詞アクセントが存在する（秋永 1985，Kubozono 1995）。そのうち、(8a)のような前部要素の最終音節にアクセントが付与されるタイプ（「デフォルト型」）が最も生産的であり、その他に、(8b)のような後部要素のアクセントが複合語においても保持されるタイプ（「保存型」）と、(8c)のような複合語全体が平板型のアクセントを示すタイプ（「平板型」）が存在する。

(8)　a.　デフォルト型：にんぎょ＋ひめ→にんぎょひめ（人魚姫）

b.　保存型：ペルシャ＋ねこ→ペルシャねこ（ペルシャ猫）

c.　平板型：さくら＋いろ→さくらいろ（桜色）

この複合名詞における 3 種類のアクセント型は、日本語の動詞由来複合語においても見られる。内項が複合語の外側で認可されるタイプは、(9a)に示すように、「平板型」のアクセントを示す。一方、内項が複合語の内側で認可されるタイプは、(9b)に示すように、「デフォルト型」あるいは「保存型」のアクセントを示す。ここでの「保存型」は、伊藤・杉岡（2002）が指摘している、内項を含む複合語において動詞連用形の動詞用法のアクセントが保持されるということと関連している。

(9)　a.　内項が外側で認可される複合語

・平板型：重ね着（かさねぎ）、船積み（ふなづみ）

b.　内項が内側で認可される複合語

・デフォルト型：窓拭き（まどふき）、魚釣り（さかなつり）

・保存型：石蹴り（いしけり）、草取り（くさとり）

一方、後部要素が 3 モーラのときは、(10)に示すようにいずれの場合も後部要素の初頭音節にアクセントが付与される（秋永 1985，Kubozono 1995）。日本語の動詞由来複合語においても同様で、(11)に示すように、内項が複合語の外側で認可されるタイプであっても、内項が複合語の内側で認可されるタイプであっても、後部要素の初頭音節にアクセントが付与される。

(10)　a.　けしき→ゆきげしき（雪景色）、はるげしき（春景色）

b.　たまご→なまたまご（生卵）、ゆでたまご（ゆで卵）

c.　おとこ→ゆきおとこ（雪男）、だておとこ（伊達男）

(11)　a.　内項が外側で認可される複合語

手作り（てづくり）、水洗い（みずあらい）

b.　内項が内側で認可される複合語

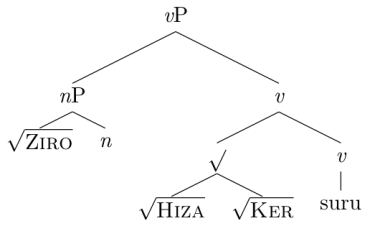
ゴミ拾い（ごみひろい）、山登り（やまのぼり）

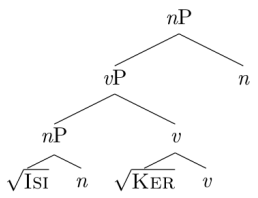
4. 分散形態論による分析

4.1 日本語の動詞由来複合語が有する 2 種類の統語構造

本研究は、内項が複合語の外側で認可されるものと内側で認可されるものが、それぞれ(12a, b)のような統語構造を持っていると主張する。

(12)　a.　内項が外側で認可される複合語　　b.　内項が内側で認可される複合語





内項が複合語の外側で認可されるものについては、(12a)に示すように、まず前部要素と後部要素の語根同士が結びついて複合語根を形成する。そして、動詞化辞が導入されると、複合語根が 1 つのフェイズを形成する（Arad 2003）ため、複合語根全体に対してアクセント規則が適用され、連濁が起こることを予測する。複合語根が形成されることによって前部要素と後部要素の緊密性が高くなり、一語としての性質が強くなるため、「平板型」のアクセントになり、連濁が起こる。また、この複合語根は直接「する」が付加され、動名詞としてふるまう。この分析は、Sugimura (2012)の「食事する」の分析と類似している。

一方で、内項が複合語の内側で認可されるものについては、(12b)に示すように、まず後部要素の語根が動詞化辞と結びついて *v* を形成するため、後部要素が動詞アクセントになることを予測する。この分析によって、(9b)の「保存型」が自然に説明される。「デフォルト型」については、動詞アクセントが保持されていないものも存在するが、前部要素と後部要素の間に明確な境界があることから、前部要素の最終音節にアクセントが付与されるという説明が可能である。また、語根が動詞化辞によって範疇化される際にフェイズが形成され、前部要素から後部要素が見えなくなるため、連濁が起こらないことを予測する。そして、この *v* は内項を取り込んだ後に名詞化辞と結びつき、名詞としてふるまうため、直接「する」が付加されない。この分析は、Sugimura (2012)の「食事をする」の分析と類似している。

3.2 節で述べたように、後部要素が 3 モーラの場合には、どちらのタイプでも後部要素の初頭音節にアクセントが付与される。これは、形態音韻が形態統語を上書きすると考えることで説明できる。

4.2 日本語の動詞由来複合語の意味解釈

本節では、日本語の動詞由来複合語の意味解釈についても、4.1 節で提示した 2 種類の統語構造を用いて説明することができるという可能性を検討する。

「ドミノだおし」と「ドミノたおし」を比較してみると、次のような差異が存在する。「ドミノだおし」は、(13a)に示すように非対格的な用法を持つので、内項を外側で認可している。それに対して、「ドミノたおし」は、(13b)に示すような用法を持つので、内項を内側で認可している。また、「ドミノだおし」は連濁が起こっているが、「ドミノたおし」は起こっていない。

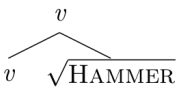
(13) a. たくさんの人が｛ドミノだおし／*ドミノたおし｝になった。
b. 子どもがドミノたおしをした。

ここで重要なのは、「ドミノだおし」がドミノのように倒れるという比喩的な意味を持つのに対し、「ドミノたおし」はドミノ自体を倒すという文字通りの意味を持つという差異が存在することである。本研究は、この意味解釈の差異も、2 種類の統語構造を仮定することによって導かれると主張する。この問題を検討するにあたって重要なのは、語が語根から派生しているか、それとも語から派生しているかという差異（Arad 2003）である。

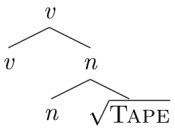
Arad (2003)は、英語の「名詞転換動詞」（denominal verb）について、語根派生か名詞派生かによって動詞の意味解釈が異なると主張した。たとえば *hammer* は、(14a)のように、実際の動作に用いるのがハンマーでなくてもよいのに対して、*tape* は、(14b)のように、実際の動作に用いるのはテープ自体でなければならない。この差異は、*hammer* が(15a)に示すように語根派生であるのに対して、*tape* が(15b)に示すように名詞派生であるということに起因する（Arad 2003: 757）。語根は範疇化されていないために多様な解釈がありうるが、一度範疇化されたものは特定の解釈にしかならない。

(14) a. He hammered the nail with a rock.
b. *She taped the picture to the wall with pushpins.

(15) a.



b.



同様の説明が、日本語の動詞由来複合語の例にも適用できる。つまり、「ドミノだおし」は複合語根から派生しているため、実際に倒れるのがドミノ自体でなくてもよいのに対し、「ドミノたおし」

は名詞化した「ドミノ」が動詞と結びついているため、実際に倒すのがドミノ自体でなければならないということになる。今後は、さまざまな例を考慮しながら、日本語の動詞由来複合語の意味解釈と統語構造の関係性についてさらなる検討を行う。

5. 結論

本研究は、日本語の動詞由来複合語が、複合の結果として内項が複合語の外側で認可されるものと内側で認可されるものの 2 種類に分類されるということを提案した。また、本研究は、分散形態論の枠組みを用いて、日本語の動詞由来複合語に対して 2 種類の統語構造を仮定し、統語構造の差異から品詞・アクセント・連濁の有無・意味解釈に関する差異が導かれると主張した。

まず、経験的には、伊藤・杉岡（2002）に対する由本（2014）の反論以降、包括的な一般化が提案されていない日本語の動詞由来複合語に対して、本研究は新しい記述的一般化を提案している。理論的には、本研究は、語根が直接内項をとるかどうか、つまり語根が項構造を持つかどうかという、形態論の分野で長く議論されている問題の解明に寄与する可能性がある（Harley 2014）。もし本研究の分析が正しいとすれば、語根が直接内項をとることはなく、動詞化辞によって範疇化されてから内項をとるということになる。また、日本語の動詞由来複合語は、これまで専ら文法の異なる部門や語彙概念構造・クオリア構造で語彙的に扱われてきたが、本研究は、分散形態論の枠組みによる統語的な分析が可能であり、音韻特徴と統語特徴の関係性、および意味特徴と統語特徴の関係性に分散形態論による原理的な説明を与えうることを示している。

さらに、今後の発展としては、日本語の複合動詞（影山 1993）に対して本研究で提案したような 2 種類の統語構造を仮定することによって、日本語の複合動詞のさまざまな特徴が説明できる可能性がある（Oseki 2020）。加えて、日本語の二字漢語動名詞の「外部表示」（影山 1999，小林 2004）という現象が、日本語の動詞由来複合語のふるまいと非常に類似しているため、本研究の分析が「外部表示」の分析に応用できる可能性がある。

参照文献

秋永一枝（1985）「共通語のアクセント」NHK（編）『日本語発音アクセント辞典』巻末付録．東京：日本放送協会出版.

Arad, Maya (2003) Locality constraints on the interpretation of roots: the case of Hebrew denominal verbs. *Natural Language & Linguistic Theory* 21, 737-778.

Halle, Morris and Alec Marantz (1993) Distributed Morphology and the pieces of inflection. In *The view from building 20*, Ken Hale and Samuel Keyser (eds.), 111-176. Cambridge, MA: MIT Press.

Harley, Heidi (2014) On the identity of roots. *Theoretical Linguistics* 40, 225-276.

伊藤たかね・杉岡洋子（2002）『語の仕組みと語形成』東京：研究社.

影山太郎（1993）『文法と語形成』東京：ひつじ書房.

影山太郎（1999）『形態論と意味』東京：くろしお出版.

小林英樹（2004）『現代日本語の漢語動名詞の研究』東京：ひつじ書房.

Kubozono, Haruo (1995) Constraint interaction in Japanese phonology: evidence from compound accent. *Phonology at Santa Cruz* 4, 21-38. University of California at Santa Cruz.

Oseki, Yohei (2020) Compound verbs in transitivity harmony and alternation. Paper presented at Morphology & Lexicon Forum (MLF) 2020.

Sugimura, Mina (2012) Root vs. *n*: a study of Japanese light verb construction and its implications for nominal architecture. *Proceedings of ConSOLE* 17, 289-298.

由本陽子（2014）「『名詞＋動詞』型複合語が述語名詞となる条件—生成語彙論からのアプローチ—」岸本秀樹・由本陽子（編）『複雑述語研究の現在』179-203. 東京：ひつじ書房.